
変態でハーレムな魔法使い！

わうわう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態でハーレムな魔法使い！

【Z-コード】

Z0537Z

【作者名】

わうわう

【あらすじ】

「こんにちは、胸を揉ませてくれませんか？」

2012年、今の現代に魔法が絡み合った世界。
主人公、神崎 海斗はぴつぴちの高校1年生。
数々の伝説を残す破天荒な少年である。

今日も女の子に【自主規制】なことをする、あるいはしてもらひつた
め、

元気に登校中っ！

時に変態で、時にシリアルスで、時に日常的な物語、ついに始まるつ

!— (ポロリも魔法もあるよつ !—)

プロローグ（前書き）

【注意事項】

- ・とりあえず、主人公は最強設定です。
- ・小説のくせして一話が超短いです。
- ・細かいところはなんとなく適当に書いてくるところもあります（泣）
- ・なんかもう色々詰め込みすぎでカオスな状況になつてたりするかもしれません。
- ・登場キャラ数が多いです。
- ・一回の投稿文字数はめっちゃ少ないです（汗）
- ・更新速度はめっちゃ遅いです。
- ・主人公は変態です。

それでも読んでもらえるよ、といつの方のみ本文へお進みください

プロローグ

【プロローグ】

高校生。

この甘酸っぱい青春の詰まつた言葉に皆は何を思つだらうか？

昔、高校生をしていた人も。
今、高校生真っ盛りの人も。
これから高校生になる人も。

十人十色。

色んな人がいて、色んな思いがある。

高校生。

楽しい思い出を作つたり。
苦い黒歴史を作つたり。

全部が全部、いいことばかりなんかじゃない。

でも、そういうのも全部ひつくるめて高校生の思い出。

綺麗だつたり。

汚れてたり。

不思議だつたり。

それらは全て、その人の思い出となり心の中に宝石となつて輝き続ける。

甘かつたり。

辛かつたり。
苦かつたり。

色んな出来事があつて、飽きる」とのない毎日。
自分次第でどんな色にも変わる高校生活。

高校は色んな感情、思い出の集まる場所。

あなたは、どんな高校生活を送りたいですか?
あなたは、どんな高校生活を送りたかったですか?

俺は・・・

プロローグ（後書き）

はい、変態な作者です。

今回は注意書きとへんなプロローグしか投稿できないといつ非常に
残念な結果となりましたっ・・・

これから変態主人公頑張つて考えますからっーー！

それと、どうでもいい情報。
作者はシスコンです！！

・・・「めんなさい、なんでもないです（泣）

入学式（前書き）

【注意事項】

- ・とりあえず、主人公は最強設定です。
- ・小説のくせして一話が超短いです。
- ・細かいところはなんとなく適当に書いてくるところもあります（泣）
- ・なんかもう色々詰め込みすぎでカオスな状況になつてたりするかもしれません。
- ・登場キャラ数が多いです。
- ・一回の投稿文字数はめっちゃ少ないです（汗）
- ・更新速度はめっちゃ遅いです。
- ・主人公は変態です。

それでも読んでもらえるよ、といつ方のみ本文へお進みください

入学式

校門の前にて。

「お兄ちゃんの変態つ

「ぐはつ！？」

『妹』からの華麗なひじ鉄に悶絶する『兄』が一人・・・。

妹。

「女の子の胸ばっかり見てつ！」

名前は【神崎 美咲】

この物語の主人公である、神崎 海斗の妹である。

身長は155cmと、女子の中では平均的。

髪の毛は肩に少しかかる程度で、横に片方に結わえてリボンを付けているのが特徴的。

兄。

「いや、たまたま目がいつちゃつただけだって・・・

名前は【神崎 海斗】

この物語の主人公である。

身長は173cmとこれまた平均的。

髪の毛に、癖はなく肩にかかるか、かからないか程度のオーソドックスな髪型。

「本当に・・・？」

疑いの目で兄を見上げる妹。

「本当に？」

その妹から逃げるように田んぼを逸らす兄。

「ホントウ？」

今度は二ヶ「ことした（ただし、田は全く笑っていない）笑顔で。

「すみません、見まくつてました。」

なんとも情けない兄つぶりを披露する。

「もう、お兄ちゃんつたら・・・そういうことなら私のを見れば・・・

・ブツブツ。

なにやら急になにか妹が独り言をつぶやき始める。

「なあ、とりあえず校舎に入ろうぜ、入学式に遅刻するなんて嫌だ
る、な？」

今まで女の子の胸ばかり見ていた自分のことは棚に上げ、妹の妄想
世界を打ち碎くため、
もつともじらしい正論を吐く兄。

「ふあつ！？ そもそも、そうだねお兄ちゃんつ！ 早くいこつ！...」

やつと現実に返ってきた妹は顔を真っ赤にしながらパタパタと校舎
に向かつて走つていった。

その後ろ姿を眺めながら兄は・・・

「まったく・・・なんて可愛い妹なんだつ！」

・・・と、変態シスコン発言を堂々と呟いていた。

『後ろから覗かせていた殺氣には気が付いていないフリをしながら

『』

「なつ！？ ひ、広いな・・・無駄に・・・
校内に入つてみると、なんのために作つたのか、あまりにも大きな
下駄箱が『海斗』を待ち受けていた。

「お兄ちゃんっ！ 時間なによつ、遅刻しちやうつー…」
『美咲』はこの馬鹿げた大きさの下駄箱に気づかない様子で海斗に
急ぐよつに促す。

「そんな慌てる美咲も可愛いよ。 よし、行くかっー！」
前半部分に変態丸出しな言葉を発してたのは秘密

「ふあつ！？ も、もう・・・お兄ちゃんのバカつ、・・・ふふ、
いこ？」

そんな海斗の緩み具合に美咲は呆れたのか、落ち着きを取り戻した
様子で海斗に微笑みかけていた。

体育館へ

。

「はあ、はあ・・・やつと着いたあ。」

俺たち兄弟はなんとかギリギリ入学式の行われる体育館にたどり着
いた。

「だからなんでこんなに広いんだよ・・・」

そこは、まるで校庭をそのまま体育館にしてしまつたような広さだ
った。

一体、何をするつもりなんだろうか・・・？

「お兄ちゃん、あっちの席、空いてるよ！」

美咲が空いている席を指差しながら田一杯の笑顔を海斗に向ける。

「お、お、今行く！」

海斗はそう言い、美咲の座った席の左隣に座る。

美咲は未だに興奮した様子で目を輝かせながらキヨロキヨロあたりを見回していた。

（しつかし、こんなに元気な美咲を見るのも久しぶりだな・・・）
それに、さっきまで走っていたため、頬がほんのりと朱に染まっている。

そして、そこに田一杯の笑顔。

笑顔がまぶしいとはまさに今の妹のことなのだな、このときの俺は思った。

やつぱり、高校生はいいものだな・・・
俺はしみじみと感じた。

妹の中学生から高校生への成長。

体はさすがに突然変わったりなんてしない。

しかし、中学から高校に上がったことで、気持ち的にワンランク大人になったようだ。
身体的ではなく。
精神的に。

普段の可愛い外見からチラリと色香を漂わせる魅惑的な体になつていた。

一言で言えば。

『最高だ』

俺が人生で見てきた妹史上で最も可愛いと断言できる。たしかに、俺の人生はちっぽけでまだ、俺の知らない妹たちもいるのだろうが、

それでも、『俺の妹』は最高だといえるだろう。

『つまり、俺の妹が、最高で最強だといつーー!』大事なことなので、これから何度も言います。

「ふう・・・・」

妹の隣で海斗はそんなことを考えていた。
なかなか重度なシスコンぶりである。

「あつ、お兄ちゃん、式が始まるみたいだよつ?」
「ん、ああ、そうだな」

視線を前に戻す。

壇上には学校長がマイクに手を取り、新入生に歓迎の式を執り行つ準備をしていた。

ここから始まる。

この世界。

いや、全世界を動かす少年の物語が・・・。

入学式（後書き）

あとがきはこつもいから。

シスコンな作者です。

主人公の登場ですっ！！

今回は、変態ではなく。

シスコン重視なお話となつてしましました。

しょうがないね。

妹可愛いもんね。

いつかタイトルが【シスコンで変態な魔法使い】とかになりそうです（笑）

・・・とまあ、そんな[冗談はこれぐらい]。

魔法要素はまだまだ出てきません。

ハーレム？ 当分来ないよ？

すみませんっ。 すぐ出しますっ！！

それじゃあねっ！！

「俺、美咲と離れるべからなら……」

「私も、お兄ちやんと会えなくなつちやうべからなら……！」

『いま、ニード……』

しかし、妄想を現実にする勇氣は、この一人にもなかつた。

俺は美咲の頬にそつと触れる。

彼女は、少しくすぐつたそつにしながらも海斗の手を受け入れる。

その顔はほんのりと朱に染まっていた。

手を、肩のほうに動かす。

美咲はびくつと反応して、体を揺する。

俺は構わずそのまま肩を両方の腕で抱きしめる。

しばらくそのままの状態を維持していると、美咲も慣れたのか、
海斗の腕を自分の手できゅっと掴む。

その反応に俺は満足し、そのまま美咲の体を半回転させる。

「田、つぶつてゐ」

「う、うん・・・

ぎゅつと美咲が田をつぶる、その姿が妙に愛おしく、その状態を維持したいと、

俺の本能が告げているが、そこは我慢。

俺は後ろから美咲の体をゆっくりと押していく。
そして壁にぶつかる少し手前でとめる。

その壁には『一人にとつては』重要なことが書かれていた。
しかし、美咲は目をつぶり、俺は壁から目を逸らしていたので、内容は一人とも知らない。

(怖いのか)

美咲の体がかすかに震えていたことに俺は視覚ではなく肌で感じ取つていた。

だから。

「大丈夫、俺がついてる」

短い兄の言葉。

しかしそれゆえ、本音であることがストレートに伝わる言葉であつた。

それに。

「うん、分かった、お兄ちゃん」

短い妹の返事。

本音を本音で返す。

それが全く嘘偽りない言葉だといつことはすぐに分かることになる。

「美咲・・・行くぞ?」

言葉のままに。

「うん、お兄ちゃん・・・」

全てを受け入れ。

妹は目を開け、俺は見ないようにしていた壁を見つめた。

「俺・・・2組だ」

「わ、私は・・・ふあ・・・2組だあーー！」

「よし、これで一緒のクラスだつーーー！」

「そりだねつ、お兄ちやんつーーー！」

「よし、これで一緒のクラスだつーーー！」

兄妹一人そろつてその結果に満足し、喜び合つた。

(ちなみにクラスは1組から9組まである。なかなかの確立である)

しかし。

その振り分けが皆平等に行われたのであればの話である。

教室内。

教室の中は普通の高校のものといったって変わらない・・・ただ、広さだけが普通ではなかつた。

2人用の席を1人で使えるレベルとすると分かりやすい。とても、40人クラスの広さではなかつた。

海斗は自分の席を探す。

この座席の順番はこここのテストを受けたときの受験番号順だったはずだ。

しかし、クラスの振り分けにより、番号が飛び飛びになつていていため、おおよその場所しか分からぬ。

「たしか、ここいらへんだったはず・・・」

海斗は廊下側のほうへ歩いていく。

「おっ、あつたあつた

海斗は自分の席を見つけ、そこへ座りこむとする。

しかし。

「あの、そこ・・・わ、私の、席・・・です」

蚊の鳴くよつなか細い声が後ろから聞こえた。

「えつ・・・」

振り返る。

後ろにいたのは、

目を潤ませ、今にも泣き出しそうになつていてる女の子だった。
その嬌げな姿に海斗はすっかり見とれてしまつていた。

白い肌。
細い体。

か弱さを極めたような体つき。

その体を維持して生きていることに感動を受けてしまつそつなほど。

少女は嬌げだった。

しかし。

それを凌駕するほど、
少女は美しかった。

もし、その姿を例えるなら・・・

「女神みたいだ・・・

自然と言葉がこぼれる。

それは海斗の本心であり、嘘偽りのまつたくない言葉だった。

「え つ？」

それゆえ。

目の前にいる純真無垢な女の子にはその言葉は刺激が強すぎたようだつた。

「つふええええつー？」

今まで、美しきさざれの白を体現させていた顔に、一瞬にして赤に染まつていつた。

そして・・・

その様子を見ていた海斗はふと、気づいてしまつ。今まででは少女の放つ『儂げ』な像に見とれてしまつていて、気が付かなかつたが・・・

少年は見つめつた。

その少女の大きく実つた二つの果実を。

「な つー？」

驚きは一瞬。

理解してしまう。

その神聖とも思えたその体に。

世の男たちを魅了してやまない悪魔のような誘惑を。

反則だ。

海斗はその一瞬の驚きの中で思つ。

そんな美しい女神のような体を持つていながら。男を惑わす魅惑の武器をも有しているなんて。

驚きのあとは行動。

それも一瞬。

迷つことなじなく、その高校生では実りすぎな一つの果実に飛び込む。

こじは我慢とか。

高校生としてとか。

そんな見えない鎖を一瞬にして破壊し。

自分の欲望にのみ忠実に。

今ある真実に素直に飛び込んでいく。

それが海斗の、

本心であり。

全てであり。

彼を突き動かす『力』なのである。

「おっぱい揉ませてくださいあああああい……」

少年は少女に飛び掛る。

周りの少年たちもその光景にほんとどが気づいていた。

そして、その一瞬後の光景を待ち焦がれていた。

だからこじ、海斗という少年はそのまま行動し続けることが出来た。

クラスの男子が味方、あるいは傍観者になっている。

そのまま、飛び込んでいいと。

無言の雰囲気を作り出している。

それは。

嫉妬であり。

期待であり。

希望であり。

後ろめたさがあり、

しかし、自分たちでは成し得ないことであつた。

そう。

このとき、男子はこの少年に味方した。

男子だけは

「うちの舞に何してんのよバカー——つーーー！」

卷之三

右方向からの糸人ギンケ

そのまゝ壁に呪わしきられる。

「ふんっ、女の子の胸を無理やり触ろうなんて・・・最低っ・・・」
本人よりも明らかにキレている少女が言つ。

「お、お前の胸も、小さい、ながら・・・美乳・・・だな。
「なつ！？」

壁にめり込み

卷之三

「なななな、何言つてんのよつべー」「ぐふつ！？」

再度蹴りが打ち込まれる。

そのとち海斗は見てしまつた。

少女の蹴りが決まった瞬間、スカートの中からチラリと見えた白い布が。

「…………白…………か。」

「……………………ツ…………？」

最初はキヨトンとしていた少女だが、海斗の言つたことの意味を理解した瞬間、

顔を瞬時に真っ赤に染め上げ、第3撃を繰り出す。

「この変態っ！－！」

「ぐはあ！－！」

その後、海斗の姿を見たものはいない……（笑）

隣の席の女のト（後書き）

あとがき。

なかなか先に進まない本編。

この先をどう書くのか・・・

全くもって・・・マズイッすね（笑）

とつあえず、この辺りはゆる〜く行きますかね。

「ふう・・・緊張するなあ・・・」

1年2組の教室の前で、ある一人の新米教師が呟いた。

彼女の名前は【秋山 菜月】
あきやま なつき

『年齢はひ、秘密ですっ！！』

今日からこの名門校【魔法立アグラライア高等学校】1年2組の担任を務めることになった。

学校長から、突然担任に任命されたときは驚いたが、せっかくくれたチャンスを無駄ににするわけにはいかないと、引き受けたのだった。

ひたむきに努力を重ねた。
ひたすらに。
どこまでも。

そのため。

「竹島たけしまの奴、毎回毎回 私の胸ばつか見て、いつか叩き潰してやるんだからっ！」

精神的に少々疲れ気味のようです。

「でも、今日からここでは1年2組の先生、
皆から好かれるような先生でいなくっちゃ！」

菜月は自分を鼓舞し、教室の扉に手をかける。

『ガラガラガラッ』

教室の扉を開ける音。

一瞬、昔の学校時代を思い出した。

意味もなく大きな音を立てる扉の音。
そして扉の奥。

期待や不安、色々な感情が混じりあつた世界。
ここ的世界、あちらの世界。
この扉が境界線。

どんな世界が待っているか、扉を開けてみなければ分からない。
それはとてもワクワクして、でも、とても怖くて。

それはまるで宝箱を開けるよ。

当たりやハズレがある宝箱。

私は今、その宝箱を開けようとしている。

心臓が高鳴る。

それは長らく忘れていた懐かしい感じ。

このときになつて、初めて先生になつてよかつたと思つ。
こんなドキドキを教師は毎日感じられるのか・・・。

「ふふつ・・・・」

そんなことを思い、ちよつとだけ胸の中が晴れやかになる。

「さあて、いっちょ、やってやりますかっ！！」

菜円はまぶしいくらいの『光』を感じながら教室へ足を踏み入れる。

そこには。

「え……………？」

顔を真っ赤にした少女と。
壁にめり込んだ少年がいた。

「あ～っ」

どうやら、私は『ハズレ』を引いたらしき。

「あ～、先生っ・・・これは・・・その・・・。」

顔を真っ赤にした少女がじどりもじどりと弁解の言葉を探している。

そこへ、壁にめり込んだ少年がその言葉にかぶせるよつて。『
「せ、先生っ！ Dカップですねっ！ そして、その魅惑的みわくてきな体、
最高ですっ！」

「……………っ！…？」

少年の言つてることを理解した瞬間、思わず悲鳴をあげようとした
てしまった。

（な、なぜ私のバストサイズを…・・・っ！…？）

そうじうじてこるつちこ、少年は壁から抜け出し、何事もなかつた
かのよつて。

そのまま菜用のまつに向かつてきた。

そして。

唐突に。

「すみません、胸、揉んでもいいですか？」

爆弾発言投下。

「……………はい？」

あまりにもぶつ飛んだ言葉を聞いたので、思考が停止してしまつていた。

それでも、少年は止まらない。

「いやあ～、先生すつじく綺麗だから、揉んでみたいなーなんて」

これは冗談なのか、本気なのか。

それを確認する前に、次の刺客しがくがやつてきた。

「アナタつ、先生に向かつて何言ひしるのよつ……！」
「ぎやあああああー！」

今度は、まるで『クラス委員長の鏡』のような少女が杖を振りかざし、少年を『叩き潰して』いた。

それはこの世界でいう『魔法』と呼ばれるもの。
体内の魔力を消費して、『奇跡』を生み出すもの。

神から与えられし『力』

そのクラス委員長（決定事項です）の放つた魔法は、ハンマーを形どつたもので相手を叩き潰すといふ、
無属性の物質系魔法である。

形どつた物であるため、強度や重さなどはその使用者に委ねられるが、彼女はかなりの魔法の腕を持つてゐることは、その地面にめり込んでいる少年を見れば明らか

であった。

しかし。

普通に悪行に走る生徒を止めるためだけならば、
ここまで強い制裁を加える必要はない。

ならば、なぜこんなことをしたのか。

彼女がこれほどまでの制裁を加えたことには理由があった。
要するに。

『次、こんなことしたら、アンタたちもこの少年と同じ末路をた
どじることになるわよ』

ところがこの言葉がこの魔法には隠されていたのだろうと菜月は直感的に
理解した。

しかし。

この少年も難儀なものだと思つてしまつ。

周りへの威嚇のため、その犠牲となつてしまつたのだ。

それでも。

その少年は少しよじりめきながらも、やつくつと立ち上がる。

なぜ立ち上がるのか。

その目にはさつきから変わらない人をなめるような視線を携えて。
周りを見てみれば、このクラスほぼ全員の視線はその少年に釘付け
になっていた。

その少年のすることを見逃してはいけないといつ。

まるで、それが彼の『魔法』であるかのよつ。

「あれ・・・魔法?」

そこで菜月は気づく。

その少年と他の生徒の『違い』について。

他の人たちには分からぬ、『菜月にのみ』分かる違い。

「どうして……」

ちょっとした違いは疑問につながり、それは聞かずにはいられない人間の本能となり、疑問を口にする。

しかし。

それはあまりにも美しい少女の声により、打ち消されてしまつ。

「お兄ちゃん。先生来了よ。席にもどる。」

それは短い波となって、クラスにいきわたる。連ねるのではなく、連続に。

クラスは静寂に包まれる。

それはおおよそ人と表すことが畏れ多いような、

女神のような姿。

たたず
佇まい。

声であった。

「む・・・そうだな、ごめんな、美咲・・・心配かけちまつて」

その空間で唯一その『女神』を『少女』としてみていた少年が周りのものには触れることすら

畏れ多いである「体に触れ、頭を撫でる。

非の打ち所のない顔つき。

若干幼さが残つてはいるが、それはそれで行き詰る美しさではなく、

柔らかい

温かさを感じる。

全く似てない兄妹だな。

菜月は心中でそう思った。

あのボロボロの少年。兄と、

あの女神のような少女。妹が席につくと、

他の生徒達も野次馬態勢を解き、各自の席に戻つていった。

菜月もその流れに乗つて、先生としての責務をまつとつする。

しかし、妹の登場により、菜月の疑問は解決しないままだつた。
あの生徒は、兄のアレを知つてゐるのだろう。
だからこそ、あの場面で入つてきたのだろう。

つまり。

知られたらまずいことなのだろう。

特にこの『魔法学校』では。

だとしたら、本人に聞くのは良くないかもしねない・・・。

どうすれば・・・？

・・・学校長に聞けばいいか。

おそらくあの生徒のことを知つてゐるだろう人物に聞くのが妥当だ。
今後、あの兄妹と付き合つていくうえで、大事なことになるだろう。

なぜなら。

『「この魔法学校に面と接する」と自体が危つくなるかもしれないからだ』

女教師の憂鬱（後書き）

今日は女教師視点でのお話。

いや、やっぱり女の先生は最高だね。

次の話もこれでいいかな？

しうがないよね、好きなんだもの！

てな感じで、主人公が活躍するのはまだまだ先のこと。

もうちょい待ってね！

それではっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0537z/>

変態でハーレムな魔法使い！

2011年12月17日21時51分発行